

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 梁媛淋

本論文は、ペリー到来以前の大大名四家を取上げて、家臣団の身分構造を、「分限帳」などの台帳により様々の指標について分析・比較した、実証的かつ開拓的な研究である。

従来、近世日本の武士の身分構造は十分に研究されてきたとは言えない。近世の初期については、個別の藩に即して一応の記述が行われてきたが、二百数十を数える大名家の共通性や多様性を説明するに足るだけの網羅的で一般性を持つ研究はない。また、幕末に関しては、明治維新の主役は下級武士であったとの認識から、かつて「下級武士」論が流行したが、その研究範囲は狭く、「下級武士」自体の定義も曖昧なままであった。その中であって、磯田道史『近世大名家臣団の社会構造』（東京大学出版会、2003年）は、総計 78 の大名家を対象に、その家格観念、婚姻、養子、階層の再生産構造、居住形態など様々の側面を横断的に分析した研究であったが、それを継承・発展させる研究はほとんど現れなかった。農村の経済・社会や身分的周縁の研究が隆盛を極めてきたのに対し、支配集団の中核をなした武士団に関してはその実態はほとんど分っていないのである。

こうした研究状況に対し、本論文は打開のための着実な一步を踏出そうとする。対象は大・中・小の大名のうち大大名に絞り、時期は研究がほとんどなかった幕末を選んでいる。幕末に石高・官位などで「大大名」と呼べるものは約 30 家あった。本論文はそれらの一覧表を作成した上で、萩毛利家、米沢上杉家、彦根井伊家、名古屋徳川家を選び出した。規模をほぼ揃えた上で、関ヶ原以前に成立した旧族大名から二家、徳川譜代から一家、徳川一族から一家を選んで、その内部の身分構造に精緻な分析を加えたのである。大大名には、仙台伊達、佐賀鍋島、鹿児島島津など、他にも重視すべき大名があったが、それらは大身の家臣に領国支配を委ねる地方知行を根幹とする体制であり、今日、大名直轄の家臣団以外のデータの入手ははなはだ困難である。史料の有無、および統治組織の類型から考えて、研究対象の選択は妥当と言って良いだろう。

さて、本論文は、史料や研究史を論じた序章に続き、4 家について各一章を当てて精細な分析を行い、終章でその成果を比較分析している。各大名家については、まず家臣

団の代表的な名簿であった「分限帳」およびその他の関係史料について、その所在や形態、および史料としての性格を解説し、次にそれらに基づいて、家臣たちの所属した基本身分を探り、その組や役職を忠実に再現・記述する。また、各家臣に支給された給禄とその階層分布を統計的に明らかとし、その後、基本身分・給禄・御目見・騎馬資格などの諸基準においてどのような整合性や不整合が見られたかを分析している。

大名家内部の階層構造を示す史料は多様である。一般に「分限帳」という名称を持つ史料が存在し、家臣の名と給禄高を記すが、その収録範囲は、軍制に由来する組を主に記すもの（萩・米沢）・現職を記すもの（名古屋）・所属を示さないもの（彦根）と多様であり、知行取りに限るもの（毛利）もあれば蔵米取りなど他の給禄方式も含むもの（米沢・彦根・名古屋）もある。したがって、家臣団の身分構造を一般的に把握するには、「役付帳」などの他の史料も参照し、対応関係を慎重に分析せねばならない。本論文は各大名家の原史料まで遡って関係史料を探索し、張紙の状況から作製時期を割出すなど、多大の労苦を重ねた結果、成立したものである。

本論文の主な発見は次の通りである。①家臣団の人数は萩・米沢・名古屋がほぼ同じで、彦根がその半数であるが、実高は萩が 89 万石、米沢が 28 万石、名古屋は 91 万石、彦根が 34 万石であった。米沢は二度の削封を経ながらなお家臣団を抱え続けたため、100 石未満の小禄家臣が圧倒的な数を占めた。②家臣団の基本身分は大まかには家老・番頭、馬廻り、徒士、徒士未満の四つに階層化されており、徒士までは共通して台帳で把握されている。③そのうちで約 2% の 1000 石以上に家老・番頭などへの就任を含む特別な地位が与えられている。④小禄になるほど人数が増す傾向が認められるが、米沢では 200 石代、彦根では 100 石代にピークがあった。それぞれ「加増」や「定禄」など、職務遂行の必要や家臣の生活安定のために工夫された給禄制の影響である。⑤徒士未満に関しては記録が十分でない。正規の家臣団と認められていなかったわけだが、この徒士以上との差別は徳川系大名に顕著だった。⑥基本身分の移動は皆無に近いが、名古屋は例外で徒士から馬廻りへの昇進がかなり見られた。⑦当主一人の奉公が原則だが、嫡子で勤務するものが彦根では御目見以上で 17%、名古屋では 22% を占めていた。徳川系大名は減封を経験した萩・米沢と比べて財政的ゆとりがあったためであろう。⑧家老・番頭クラスは身分の諸条件を全て満たしていたが、馬廻りの下層と徒士では基本身分の差にかかわらず家計水準では変らないものが多数あった。⑨主君への御目見の可不可と知行取か蔵米取かの給禄方式の差異とは一対一の対応をしないが、御目見以上の半数以上が知行取、御目見以下の 9 割が蔵米取であった。⑩騎乗資格は御目見以上の 7 割が有

していたが、萩は例外的に2割に留まった。⑩諸基準の間で不整合が見られたのは、萩と米沢で約8割、彦根・名古屋ではそれぞれ約5割・4割に上った。⑪家臣団の身分階層は、上級家臣を家老・番頭ら、中級家臣を諸基準全て満たす騎馬士、下級家臣を諸基準間に不整合をもつ人々という具合に定義することもできる。

以上のように、本論文は、4つの大大名家について数々の発見をもたらした。「分限帳」などの関係史料の忠実な紹介と精緻な分析は他に得難い業績であるが、それに加えて、石高階層の統計分析は初めての試みであり、大名家臣団の階層分布を一目で把握し、かつ比較する道を開いたことは画期的である。また、身分の諸指標の間にある整合・不整合を初めて意識的に分析したことは、下級武士の実態を理解する確かな手掛りとなっている。

しかしながら、多少の問題もなくはない。近世を生きた武士たちが家臣団内部の身分制をどう意識していたかに言及がない。せつかく制度の記述や統計に膨大な労力を注ぎながら、画竜点睛を欠くように思われる。また、幕末を分析しながら、明治維新との関係については終章末尾で簡単に触れるに留まる。しかしながら、これは過去の研究者たちがいずれも失敗してきた領域であって、制度的・統計的所見から直ちに維新による突如の崩壊を説明することは至難でもある。その解明には別の本格研究を要するはずである。本論文の価値は、そのための基礎情報を着実な史料研究と新たな分析法の導入を通じて提供したことにある。今後の日本近世史・明治維新史の発展のために貴重な貢献をしたと言えるだろう。

したがって、本審査委員会は、本学位請求論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。